

大学生における自我同一性と分離個体化との関連

－自我同一性の拡散の経験と取り組みによる現代青年期の自我同一性課題の検討

掛橋 未侑

(山 愛美ゼミ)

問 題

自我同一性 (identity) とは, Erikson (1956) が精神分析学の立場から提唱した概念である。自我同一性は, Erikson によると, 自己の斉一性, 時間的な連続性と一貫性, 帰属性の3つの規準によって定義されうる主体的実存的感觉あるいは自己意識の総体のことを指している。

また, Erikson (1989) の提唱する漸成発達, 人間の一生を人生周期 (life-cycle) と呼び, その中に8つの時期を区別して, それぞれの心理・社会的危機 (crisis) を肯定的な要素と否定的な要素の対立によって論述している。これにおける, 青年期の心理・社会的危機は, 「自我同一性の確立対自我同一性の拡散」である。Erikson は, 身体的, 性的成熟の始まりが訪れることによって, 児童期までに形成されてきた経験の流れに亀裂を生じ, 自己像を脅かすために, 青年期において自我同一性が問われると述べる。しかし, 「同一性形成は, その大半が生涯にわたって続く無意識的な発達過程」(Erikson, 1956) であるため, 青年期のみならず人生においても重要な課題であるといえる。

このような Erikson の自我同一性の理論は, 多くの研究者がさらに研究を重ねた。そのなかで Marcia (1964) は, 自我同一性の達成度という視点を取り入れた「アイデンティティ・ステイタス (identity status)」という概念を提唱した。Marcia は次のように述べている。「ある青年がメソジストであり, 共和党の農夫である父親と同じように, ほとんど何も疑問を感じることなく, メソジストの共和党の農夫になっているならば, この青年は, はたして, 本当に同一性を達成していると言えるであろうか」。この疑問は, 自我同一

性ステイタスの研究の基盤となった。

そして Marcia は, 自我同一性の達成の心理・社会的基準として, 個々人が自分にとって意義ある選択事項を積極的に試み, 選択し, 意思決定を行う一時期である「危機 (crisis)」と, 意思決定の後に続いておこる, 職業やイデオロギーなど人生の重要な領域に対する積極的な関与を示す「積極的関与 (commitment)」を取り上げた。そして, 職業とイデオロギー (宗教, 政治) の2領域における危機の経験と積極的関与の有無によって, 同一性達成 (Identity Achiever), モラトリアム (Moratorium), 早産 (Foreclosure), 同一性拡散 (Identity Diffusion) の4つの自我同一性ステイタスを設定した (表1)。

表1 自我同一性ステイタス (Marcia, 1964)

自我同一性ステイタス	危機	積極的関与
同一性達成 (Identity Achiever)	すでに経験した	している
モラトリアム (Moratorium)	現在, 経験している	あいまいである, あるいは積極的に傾倒しようとしている
早産 (Foreclosure)	経験していない	している
同一性拡散 (Identity Diffusion)	危機前拡散 (Pre-crisis Diffusion)	経験していない
	危機後拡散 (Post-crisis Diffusion)	すでに経験した
		していない

ところで, 近年の青年期の自我同一性の研究では, 現代の思春期青年期において自我同一性の課題が普遍的に存在しているのかという疑問を持つものが見られる。その1人である岩宮 (2009) は, 「現代の思春期の子どもたちは, 主体性がなく, 葛藤や内省のプロセスが起りにくい」と指摘する。そして, その現代の思春期の子どもたちには「今の子どもたちの主体の立ち方」があり, 「内面で悩みを抱えたり葛藤に苦しんだりするような意識の持ち方とは違う意識が若い世代に芽生えている」のではないかと述べている。

さて, Mahler (1975) は, 精神分析的観点に

大学生における自我同一性と分離個体化との関連－自我同一性の拡散の経験と取り組みによる現代青年期の自我同一性課題の検討

基づく実証的な直接観察法を導入して、乳幼児の内的世界を研究した。この研究より Mahler(1975)は、次のような発達過程を提唱した。

新生児は内部と外部の区別もつかない状態で生まれ、生後数週間の内にぼんやりとながらもその区別ができるようになるが、この時期の乳児と母親の境界はまだ流動的であり、両者は二者単体のように振る舞う。その後、この共生球の両極に乳児と母親という2つの個体が分化し始め、分離個体化過程が始まる。乳児は一方向的に母親に抱かれているだけの存在ではなく、母親の顔や着ている衣服を探るようになり、さらに運動機能や感覚機能の増大に伴って母親をホームベースとして自分の周囲の世界を探索するようになる。直立歩行が可能になると、自己の身体と外界に向かってリビドーが一挙に備給され、母親の在・不在に無頓着になる。しかし、この高揚感はやがておさまり、母親の不在に対して気分の落ち込みがみられるようになり、母親が自分の思い通りにならない存在であることに気づき始める。そして依存と自律を巡る激しい葛藤が起こるが、幼児は母親との距離を縮めたり拡大したりして適切な距離を見出してこの危機を乗り越え、母親と自分が異なる存在であることを受け入れて安定した自律的な存在になる。

このような発達過程は分離－個体化理論と呼ばれ、乳幼児を対象とした理論から、思春期青年期から初期成人期に好発する境界例の精神病理概念に取り入れられ、また青年期の発達論にも少なからぬ影響を与えている。その主なものとして、Blosの第2の個体化(second individuation)が挙げられる。

Blos(1962, 1967)の第2の個体化過程は、両親表象から脱備給が起きて超自我が弱化し、エディプス葛藤が再燃し、両親から距離をとることから始まる。その結果、リビドーは浮動的となり、自己愛が高まる。また、青年の自我の退行から原始的防衛機制が復活する危機的な時期を迎える。この時期、同性同年輩者集団が重要な意味を持つ。その中で青年は性的同一性が獲得され始める。すると、それまで流動性の高かった青年の自我が固定化され、成人期に向けて社会の中で自己を位置づけ、より高次のレベルで両親と和解するという

過程である。Blos(1967)はこの過程を「乳児が個体化した幼児となるために共生の膜から孵化するのに対し、青年は家族への依存から脱却して幼熟的な対象との結びつきを緩め、より大きい社会である大人社会の一員となる」と述べている。

このように、青年期は、Blosの第2の個体化のような分離－個体化過程の課題と、「自我同一性の確立対拡散」が共存している。この2つの課題はそれぞれ独立した概念として提唱されているが、ただ共存しているだけでなく、お互いに密接な関連があるものと考えられる。

さらに、青年期はErikson(1956)の「自我同一性の確立対拡散」のように、自我同一性が問われる、大変な時期だとする考えが古くから受け継がれてきた。しかし、先に述べた岩宮(2009)の主張のように、近年の思春期青年期は、長い年月と環境の違いからその様相が変化してきていると述べる研究も少なくない(岩宮, 2009, 廣澤, 2010)。このことから、今一度、青年期の様相について見つけ直していく必要があると考える。

目的と仮説

そこで本研究では、調査1において大学生を対象に、分離－個体化の状態が自我同一性の様相にどのような影響を与えているかについて検討することを目的とする。また、調査2において、質問紙調査では捉えることのできない質的なデータを得るため、大学生を対象とした自由記述式調査を実施し、青年期の自我同一性への取り組みの様相を調査することを目的とする。

調査1の仮説としては、分離－個体化理論の通り、分離個体化が達成されているほど、自我同一性の地位も高いと予想する。

また、調査2の仮説としては、岩宮(2009)、廣澤(2010)の指摘の通り、自我同一性の拡散を経験している者は少なく、自我同一性の拡散に取り組む姿勢を持った者も少ないと予想する。

調査1：自我同一性と分離個体化との関係について

方法

調査対象 京都学園大学に所属している学生 202

名に調査を実施した。そのうち、回答が無記入のものや欠損しているものは取り除いたため、有効回答数は179名（男性107名、女性72名、平均年齢20.19歳）であった。

手続き 京都学園大学の講義参加者を対象に、質問紙調査である同一性地位判定尺度（加藤，1983）と分離個体化尺度のJASITA（高橋，1989）を集団的に実施した。

同一性地位判定尺度 Marcia（1966，1980）による同一性地位概念に基づき、加藤（1983）が「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入の希求」の3変数の組み合わせによって、6つの同一性地位を定義する12項目の質問紙である。回答法は「まったくそのとおりだ」から「全然そうではない」の6件法である。

6つの同一性地位の定義は次の通りである。

- (1) 同一性達成地位：過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者。
- (2) 権威受容地位：過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者。
- (3) 同一性達成－権威受容中間地位（A-F中間地位）：中程度の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者。
- (4) 積極的モラトリウム地位：現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている者。
- (5) 同一性拡散地位：現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い者。
- (6) 同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位（D-M中間地位）：現在の自己投入の水準が中程度以下の者のうちで、その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くないが、将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリウム地位ほどには高くない者。

JASITA Levine（1986）が、養護-共生、のみこまれ不安、分離不安、欲求否認、自己中心性、健康的分離の6つの基本的な次元を想定し、作成したSeparation-Individuation Test of Adolescence（SITA）をもとに、高橋（1989）が100項目より

なるSITA日本版JASITAを作成し、小学校6年生から大学4年生まで青年期全般にわたる被験者を対象に調査を行い、青年期の分離個体化を規定している「両親からの分離欲求」「対人交流の拒否」「自惚れ」「共生欲求」「分離個体化の達成」「友人関係の確立」「1人でいられなさ」の7因子、52項目を抽出した質問紙である。回答法は「全くそう思う」から「全く違うと思う」までの5件法である。

結 果

同一性地位への分類は、加藤（1983）の分類に従って、図1のように行った。分類された各同一性地位の人数と比率は表2の通りである。

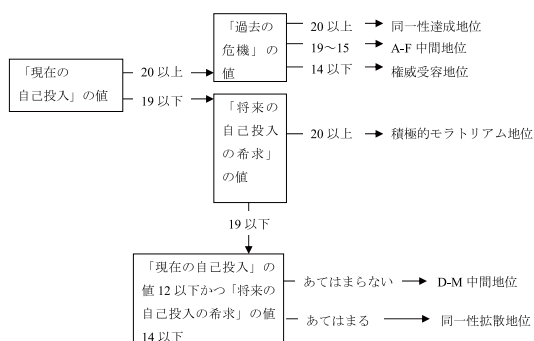


図1 各同一性地位への分類の流れ図（加藤，1983）

表2 同一性地位の人数と比率

	人数	比率 (%)
同一性達成地位	16	8.94
権威受容地位	7	3.91
A-F中間地位	16	8.94
積極的モラトリウム地位	10	5.59
同一性拡散地位	29	16.20
D-M中間地位	101	56.42

同一性地位判定尺度の下位尺度とJASITAの下位尺度の関連性を検討するために、相関分析を行い、結果を表3に示した。その結果、「現在の自己投入」は「自惚れ」、「友人関係の確立」と正の相関が見られ、「両親からの分離欲求」、「対人交流の拒否」と負の相関が見られた（ $r = .301, p < .01$ ； $r = .280, p < .01$ ； $r = -.171, p < .05$ ； $r = -.276, p < .01$ ）。また、「過去の危機」は「両親からの分離欲求」、「共生欲求」、「分離個体化の達成」、「一人でいられなさ」と正の相関が見られた

大学生における自我同一性と分離個体化との関連-自我同一性の拡散の経験と取り組みによる現代青年期の自我同一性課題の検討

($r = .255, p < .01$; $r = .155, p < .05$; $r = .247, p < .01$; $r = .352, p < .01$)。「将来の自己投入の希求」は「自惚れ」, 「分離個体化の達成」, 「友人関係の確立」, 「一人でいられなさ」と正の相関が見られ, 「両親からの分離欲求」, 「対人交流の拒否」と負の相関が見られた ($r = .220, p < .01$; $r = .210, p < .01$; $r = .208, p < .01$; $r = .237, p < .01$; $r = -.184, p < .05$; $r = -.231, p < .01$)。

各同一性地位の JASITA の得点を比較するために, 1 要因被験者間分散分析を行った。その結果, 「両親からの分離欲求」, 「対人交流の拒否」, 「自惚れ」, 「友人関係の確立」, 「一人でいられなさ」の主効果が有意であった ($F(5,173)=2.676, p < .05$; $F(5,173)=3.338, p < .01$; $F(5,173)=3.964, p < .01$; $F(5,173)=3.263, p < .01$; $F(5,173)=3.244, p < .01$)。HSD 法による多重比較の結果, 「両親からの分離欲求」の得点は, 「権威受容地位」より「同一性拡散地位」の方が有意に高いことが認められた。また, 「対人交流の拒否」の得点は, 「同一性達成地位」より「同一性拡散地位」の方が有意に高く, 「D-M 中間地位」より「同一性拡散地位」の方が有意に高いことが認められた。そして, 「自惚れ」の得点は, 「同一性拡散地位」より「同一性達成地位」の方が有意に高く, 「同一性拡散地位」より「D-M 中間地位」の方が有意に高いことが認められた。「友人関係の確立」の得点は, 「同一性拡散地位」より「A-F 中間地位」の方が有意に高いことが認められた。「一人でいられなさ」の得点は, 「同一性達成地位」, 「A-F 中間地位」, 「積極的モラトリアム地位」, 「D-M 中間地位」より「権威受容地位」の方が有意に低いことが認められた。

考 察

まず, 同一性地位の人数と比率について考察す

る。加藤 (1983) の先行研究の結果, 同一性地位の比率は, 同一性拡散地位および権威受容地位はそれぞれ全体の約 4%, 同一性拡散・積極的モラトリアム中間地位は全体の約 50%であった。

本研究の結果は, 権威受容地位, 同一性拡散・積極的モラトリアム中間地位は先行研究通りの結果であるが, 同一性拡散地位は先行研究の結果の約 4 倍の 16.2%であった。

調査を実施した環境や対象の違いもあるため, この差についてははっきりと述べることはできないが, 1982 年から 2012 年という長い時間の流れのなかで, 青年期の自己投入や危機の体験に多少の変化が生じていることを伺わせる結果であったと, 筆者は考える。

次に, 同一性地位判定尺度と JASITA の下位尺度の相関について考察する。この調査の結果から, 同一性地位判定尺度と JASITA の下位尺度において, 共通点が見られた。それは, 同一性地位判定尺度の「現在の自己投入」, 「将来の自己投入の希求」と JASITA の「自惚れ」であった。これらは統計においても, 正の相関が見られている。この 3 つの下位尺度の共通点は, 自己にエネルギーが注がれている状態である。JASITA の「自惚れ」は, 第 2 の個体化を提唱した Blos (1962) の「両親表象から脱備給されて浮動的になったりビドーが自己に注がれ」, 「自己愛が高まる」という理論に基づいて作られた下位尺度である。同一性地位判定尺度の「現在の自己投入」, 「将来の自己投入の希求」は, アイデンティティ・ステータスを提唱した Marcia (1964) の理論に基づいて作られている。Marcia は, 自我同一性の達成の心理・社会的基準として, 自己や社会への「積極的関与 (commitment)」を取り上げた。このように, どちらの理論においても, 自己にエネルギー

表 3 同一性地位判定尺度と JASITA の下位尺度の相関

	両親からの 分離欲求	対人交流 の拒否	自惚れ	共生欲求	分離個体 化の達成	友人関係 の確立	一人でい られなさ
現在の自己投入	-.171*	-.276**	.301**	-.031	.121	.280**	.053
過去の危機	.255**	-.036	.143	.155*	.247**	.060	.352**
将来の自己投入 の希求	-.184*	-.231**	.220**	.135	.210**	.208*	.237**

を注ぐ姿勢を重視していることがわかる。そのため、青年期において、自己にエネルギーを注ぐことが重要であることが示唆される。

さて、JASITA の下位尺度は、高橋（1989）によると次のように説明される。「両親からの分離欲求」は、両親から心理的および物理的にも距離をとろうとする態度を表す。「対人交流の拒否」は、他者に対する依存性を否認し、両親や友人との情緒的な対人交流に背を向けている状態を表す。「自惚れ」は、自己の能力に対する過信や自惚れを表し、「共生欲求」は、他者との共生的な関係を求める気持ちやそういった関係を維持したいという気持ちを表す。「分離個性化の達成」は自己と他者の違いを認識し自分自身の判断による行動を望む態度と、対人関係において他者の長所と短所の両面を見ることができると特徴を持つ。「友人関係の確立」は、友人関係における親交や親密さを表しており、「一人でいられなさ」は一人でいることの寂しさが強調されている。

これらの特徴から、JASITA の7つの下位尺度は、分離の力が強い「両親からの分離欲求」、「対人交流の拒否」と、分離の力が弱い「共生欲求」、「分離個性化の達成」、「友人関係の確立」、「一人でいられなさ」、自己へエネルギーを注いでいる「自惚れ」に分けられる。この、分離の力が強い下位尺度と分離の力が弱い下位尺度は、相関分析において異なる傾向が見られた。分離の力が強い下位尺度は、同一性地位判定尺度の下位尺度と負の相関が多く見られ、分離の力が弱い下位尺度は、同一性地位判定尺度の下位尺度と正の相関が多く見られた。この結果から、分離と自我同一性は、分離の力が弱まるにつれ、自我同一性の達成に向かうような関係があるのではないかと考えられる。

続いて、同一性地位と JASITA の下位尺度の関係について考察する。高橋（1989）は JASITA の7つの下位尺度の関係性を次のように述べる。「思春期的変化が起き、それまでのように両親に依存できなくなった青年は『両親からの分離欲求』を抱き、両親から距離を取るが、それは『自惚れ』や『対人交流の拒否』『共生欲求』『一人でいられなさ』という分離反応を引き起こす。これらの分離反応は『友人関係の確立』によって緩和され、青年は次第に両親や友人とは異なった自己を確立

して『分離個性化の達成』をしていく」。

このことから7つの下位尺度のなかの「両親からの分離欲求」、「対人交流の拒否」、「友人関係の確立」は、分離欲求・反応の「両親からの分離欲求」、「対人交流の拒否」と、分離反応の緩和の「友人関係の確立」に分けられる。同一性地位と JASITA の1要因被験者間分散分析の結果、分離欲求・反応に含まれる「両親からの分離欲求」と「対人交流の拒否」は、同一性地位が低い者の方が多く生じていた。また、分離反応の緩和に含まれる「友人関係の確立」は、同一性地位が高い者の方が多く生じていた。この結果から、分離個性化の達成に向かうほど、同一性地位も達成に向かうような関係性が見られる。そのため、青年期において分離個性化と同一性地位はまったく別の存在ではなく、分離個性化の達成は、自我同一性の確立にも影響を与えていると考えられる。これは、筆者の仮説を支持した結果であった。

調査2：自由記述式調査からみる現代青年期の自我同一性の拡散の経験と取り組み

方 法

調査対象 京都学園大学に所属している学生202名に調査を実施した。そのうち、回答が無記入のものや欠損しているものは取り除いたため、有効回答数は179名（男性107名、女性72名、平均年齢20.19歳）であった。

手続き 京都学園大学の講義参加者を対象に、自我同一性の拡散の経験について、下記の質問項目からなる自由記述式調査を実施した。また、質問項目は筆者が独自に作成した。

教示 調査を実施する際、Q1では、「この質問は、現在、または過去に、『自分って何なんだろう』『自分の人生の目的って何なんだろう』『自分の存在する意味って何なんだろう』と悩むことを指します」と教示を与えた。また、Q3には「あなたがどのようなことについて悩んだかを記してください」、Q4には「『自分って何なんだろう?』という悩みにどう取り組んだか、どう対応したかということ聞いています。これは、具体的な行動に

大学生における自我同一性と分離個体化との関連-自我同一性の拡散の経験と取り組みによる現代青年期の自我同一性課題の検討

限らず、自分の心の中の動きや変化なども含みます。これらを踏まえて回答してください」と教示を与えた。

質問項目

- Q1. 現在、過去を含め、「自分は何者か」「自分の人生の目的は何か」「自分の存在意義は何か」のように思い悩んだ経験がありますか？(2件法)
 Q2. その経験をした年齢は、あなたが何歳のときですか？
 Q3. その経験の内容はどのようなものですか？
 Q4. その経験にどのように取り組みましたか？

結 果

Q1の質問に、「はい」と回答した人数は89名(49.72%)で、「いいえ」と回答した人数は90名(50.28%)であった。

Q2の結果は図2に示した。各年齢の人数の集計は、複数回答を考慮したため、回答された年齢はすべて人数に加算する方法を用いた。

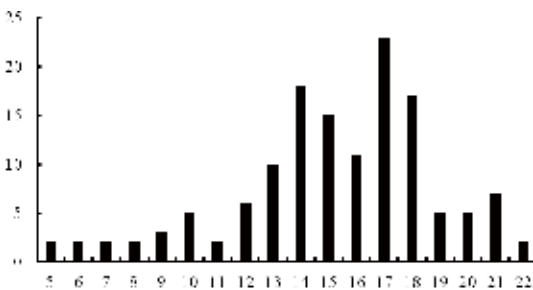


図2 年齢の人数の分布

Q3の回答の分析は、筆者と本学の大学院生2名の計3名により、KJ法を用いて行った。その結果、以下の6つの要素が抽出された。

①自我体験(14名)

渡辺(2004)は、自我体験について「社会的なアイデンティティや自己概念といった外皮を、剥ぎに剥いで残る自己そのもの、私そのもの、といった次元」と述べている。このような自我体験の定義に沿って、「自分は何者なのか、どうして生きているのか、この世に存在している理由は何なのかと考えた」のような、自我体験にあてはまる回答を含めた。

②自分の存在意義(27名)

「自分に生きている価値は無いのではないか」、「自分の生きがいを探していた」のような、自分の存在の意味や価値、人生の目的や意味について思い悩んでいるものをこれに含めた。

③進路について(17名)

「大学へ進学する時、私は何をやりたいか、何のために生きているのかを考えた」のように、受験、進学、卒業、就職活動などの人生のターニングポイントで、自分の進路について考えるとき、「自分は何をしたいのか」、「何のために生きているのか」と、自分に向き合い、これについて悩んでいるものをこれに含めた。

④死について(5名)

「死というものについて考えた時に人生について悩んだ」、「父親の死」など、なんらかのかたちで「死」というものに関わったときに、自分の存在や人生の意味に向き合ったものをこれに含めた。

⑤人間関係(17名)

「親とケンカしたり、友達とうまく付き合えなかったり、対人関係で悩んでいた」、「学校でいじめられていたとき」のように、人間関係の中で起こる衝突や葛藤、問題をきっかけに自分について思い悩んでいるものをこれに含めた。

⑥その他(9名)

①～⑤のいずれにもあてはまらず、なおかつ他に類似する回答がないものはこれに含めた。そのなかには、「授業で道徳を習った時とか、そういう映画を見た時」、「なぜ学校に行くのか」などがあつた。また、問うている内容から外れている回答や、「覚えていない」のような回答もこれに含めた。

Q4の回答の分析も、筆者と本学の大学院生2名の計3名により、KJ法を用いて行った。その結果、以下の8つの要素が抽出された。

①逃げる(7名)

「現実から逃げた」「そのうち考えなくなった」「結論づけて片付けた」のように、思い悩んでいる内容と向き合うことから逃げているものをこれに含めた。

②何もしない(5名)

「特に何もしなかった」「取り組んでいない」のように、思い悩んでいる内容に対して自ら何もし

ていないと述べているものをこれに含めた。

③身を任せる (11名)

「なにもせず、流れに身を任す」「時間の流れに身をまかせた」のように、思い悩んでいる内容に対して、周りの環境や時間の流れに身を任せるような回答をこれに含めた。

④相談する (9名)

「両親に自分の悩みを相談する」、「誰かに相談する」のように、思い悩んでいる内容を親、友達、先生などに相談し、そのアドバイスから行動を起こしたり、悩みを聞いてもらうことで精神的負担を軽減したりしているものをこれに含めた。また、Q3で「⑤人間関係」に含まれるものは、相談するという意味合いと、悩みの対象と向き合うという意味合いを持つ。

⑤置き換え (13名)

「心理学や哲学に興味を持った」、「何か他のことに取り組んだ」のように、悩んでいる内容それ自体ではなく、それと関係性のあるもの、あるいは関係のないものに取り組んだものをこれに含めた。

⑥向き合う (20名)

「ひたすら悩んだ」、「その疑問は今でも解決しておらず、ずっと心の奥に隠れている」のように、思い悩んでいる内容それ自体に取り組んでいるものをこれに含めた。

⑦とりあえず前に進む (11名)

「半年近く悩んでいたが、それではいけないと思い、思いきってアクセルを踏み、前に出ていった」、「親に質問をしてみたり、インターネットや本等で調べてみたりしたが、結局それはわからないので、これからの生活の中で、自分で見つけていこうと思いつつ生活している」のように、その悩みに対して、今の自分に出来ることを意識的に行い、とりあえず前に進んでいこうとしている様子が伺えるものを指す。

⑧その他 (11名)

①～⑧のいずれにもあてはまらず、なおかつ他に類似する回答がないものはこれに含めた。そのなかには、『「他人は他人、自分は自分」と考えた』、「常にプラスに考える」などがあった。また、問うている内容から外れている回答や、「覚えていない」や回答を拒否するもの、要素が複数あり、

1つに分類することが不可能なものもこれに含めた。

考 察

Q1では、「はい」と回答した人数が89名(49.72%)、「いいえ」と回答した人数が90名(50.28%)という結果であった。筆者は、この結果から、自我同一性の拡散の経験の有無を捉えようと考えていた。しかし、Q1の質問で捉えることができるのは、これまでに自我同一性の課題を意識したことがあるか否かのレベルだと思われる。それは、この質問が回答者の意識的な回答によるものであるからだ。筆者はこの結果の仮説として、自我同一性の拡散を経験している者は少ないと予想していた。しかし、本調査の結果で得ることができたのは、自我同一性の課題を意識したことがある者が約半数いたということであった。この結果の筆者個人の感想として、自我同一性の課題を意識している者は予想以上に多いと感じられた。そのため、自我同一性の拡散を経験する者は少ないという筆者の仮説は支持せず、Erikson(1956)の理論の通り、現代の青年期においても「自我同一性の確立対拡散」の課題を持つことを支持しようと思う。

Q2の結果、中学生、高校生にあたる13～18歳において人数の多さが目立った。これについても、思春期とされる中学生、高校生において、自我同一性の拡散を経験しやすいというEriksonの理論が支持された。

Q3では、KJ法によって抽出された6つの経験の内容について、「その他」以外の5つの要素を考察していく。

①自我体験

自我同一性の拡散が、自己を社会のなかに位置づける問いかけなのに対して、自我体験は、自己そのものの問いかけであるため、この2つはまったく別のものとして扱われている。渡辺(2004)は、この自我体験の生じる理由を次のように論じている。「こどもはまず、主観的な世界に住むが、4、5歳頃から客観的世界像を獲得することによって、『多数の人間たちの中のひとり』という『類的な自己』が成立する。けれども、ある日、あるきっかけによって主観的な世界を再発見するが、客観

大学生における自我同一性と分離個体化との関連－自我同一性の拡散の経験と取り組みによる現代青年期の自我同一性課題の検討

的な世界像の中には、すでに主観的世界の占める場所は見出せない。そこで、これら2つの世界像を統合することのむずかしさが、自我体験や独我論的な体験といった独特の体験となって、現れることになる」。このように、自我体験と自我同一性の拡散は、生じる過程においてもまったく色合いが異なるものである。また、本来ならば、これに続いて自我体験の考察をするべきであるが、ここで取り扱うには大き過ぎるテーマであるため、本稿ではこれ以上扱わない。

②自分の存在意義

この要素では、「何のために(行動)するのか」「なぜ(行動)しているのか」という言葉やそれに類似した言葉がほとんどの回答で見られた。これは、①自我体験の自分そのものへの問いと比べると、自分そのものについて既に認めることができている状態を前提としている問いであると思われる。つまり、これに含まれる回答は、自分の存在や人生が存在する上での、自分の現在または今後の振る舞いについて思い悩んでいる状態である。このことから、この要素は自己実現に向かって取り組んでいる要素であると思われる。

③進路について

受験、進学、卒業、就職活動などの人生の転換期は、多くの人にとって自分と向き合う機会となるだろう。選択を迫られる転換期と向き合うとき、人は自然と自分の「影」を意識すると Jung (1939) は述べる。Jung は「影」という元型を提唱した。人生において「影」は、自分が生きなかつた、また生きられなかつた自分を指す。そして、人が影の部分に押しやっていたものといかに取り組み、再統合していくかということが、自我同一性の達成に結びつく中年期の課題であると考えた。このように、「影」の概念は、転換期に自分と向き合う1つの要素であると考えられる。

④死について

「死」は、生きているものなら誰も向き合うことになる重要なテーマである。Freud (1917) が提唱した「喪の作業 (mourning work)」の概念では、死の悲しみと向き合いそれを受容することは、自分と向き合うことでもであると述べられている。そのため、「死」をきっかけに自分と向き合うことは重要かつ必要な過程であると考えられる。

⑤人間関係

この要素では、すべての回答が人間関係の中で起こる衝突や葛藤、問題などのネガティブな出来事が記述されていた。このことから私たちは、ネガティブな出来事に遭遇したときに自分と向き合う必要性が生じるのではないかと思われる。

Q4についても、KJ法によって抽出された8つの経験への取り組みについて「その他」以外の7つの要素を考察していく。

①逃げる

これは、取り組むことを積極的に拒否している状態である。その理由として、その悩みに取り組むことに自我が耐えられないと自己が察し、積極的に拒否していると考えられる。また、積極的に取り組むことを拒否することは、悩みに対して「逃げる」という積極的な行動を起こしたとも考えられる。「逃げる」という言葉はネガティブなイメージが強いが、時と場合によっては「逃げる」決断がポジティブな意味をもつことは多くある。そのため、「逃げる」という行為は、必ずしも否定的な取り組みではないと筆者は考える。

②何もしない

悩みに対して「何もしない」ことは、取り組みによる自我の負担を軽減していると考えられる。しかし、取り組みを積極的に拒否することではないため、悩みを自我に保持することができる状態だと感じる。また、回答の中には、「取り組むほどの悩みだと感じなかつた」、「取り組む方法がわからなかつた」という回答も多くあつた。このような回答を見ると、悩みに一度は向き合っていることがわかる。心の中の動きは、現実的な行動を起こすことと比べ、「何かを行った」という実感が得られにくい。そのため、「何もしない」という回答が本当に何もしていないとは言い切れないと思われる。

③身を任せる

悩みに対して身を任せることは、自我の力の及ばない心の無意識の働きに身を任せている状態だと考えられる。また、悩みに対して身を任せることは、悩みと共存している状態であるとも考えられる。悩みと共存することは、悩みに対して常にエネルギーを注いでいる状態でもある。そのため、自我の強さも要求される。そのため、「身を任せる」

ことができるということは、ある程度強い自我を持っているということであると考えられる。

④相談する

相談することは、自分1人の自我ではその悩みを保持し、取り組むことが難しいが、他者にその悩みを相談するという意識的な行動で、自我への負担を軽くしているものと考えられる。

⑤置き換え

この名称は、欲求を本来のものとは別の対象に置き換えることで充足することを意味する、防衛機制の「置き換え(displacement)」に由来する。「置き換え」は、悩みに直接向き合うことで生じる自我の負担を、他のものに置き換えることによって減らす働きをしていると思われる。しかし、これは悩みに直接向き合っているわけではないため、本質的な悩みの解決からは遠ざかっている状態であると考えられる。

⑥向き合う

これは、自我への負担はあるが、自我が悩みを保持できており、かつその悩みに直接的に向き合っている状態である。しかし、回答のなかには、「今でも答えは出ていません」のように、まだ解決しておらず、悩み続けているものも多かった。これは特に「自我体験」に対して多く見られた。渡辺(2004)は「自我体験」のような疑問が本当に解決されることはないと述べている。しかし、そのような難しい疑問を保持し、取り組み続けているということは、それに耐えうる頑丈な自我を持っていることが示唆される。

⑦とりあえず前に進む

これは、悩みを保持し、向き合った後、悩みの解決に結びつくような意識的な取り組みを、今の自分に出来ることから行っているものである。これらの回答からは、「いつまでもくよくよしてられない」のような、ひたすら悩むことに対するネガティブな気持ちが見られた。これは、ひたすら悩む時期を経験した後に、悩みの解決に結びつくような行動を起こしていることを示している。このことから筆者は、ひたすら悩む時期に自我にエネルギーを蓄えることができたため、悩みの解決に結びつく意識的な行動を起こすことができたのではないかと考える。

また、⑤や⑦の回答を中心に、Q4の回答では、

「とりあえず」という言葉が多く用いられていた。「とりあえず」の語源は、「トリアエ(取り敢え)+ズ(打ち消し)」である。その意味は、「事態に十分に対応できないので」や、「取るべきものと取らずに」とされる。このことから、「とりあえず」は悩みに対して十分対応することができない様子と、取り組むべきものに対し、完全には取り組みきれないという意味があると考えられる。また、山下(1994)は、「とりあえず」は人間の意志的行為にかかわる表現と述べている。そのためQ4の回答においても、「とりあえず」が用いられた取り組み方は意識的に考えられた行動であることがいえる。

以上のQ3、Q4のKJ法の考察から、自我同一性の課題は、その内容や取り組み方によって様々な様相を持つことがわかった。また、Q3の⑤人間関係では、調査1で取り上げた分離個体化の要素である、「両親からの分離欲求」や「対人交流の拒否」、「自惚れ」、「友人関係の確立」の要素を含んでいるものも見られた。このことから、調査2においても、青年期の分離個体化の課題と自我同一性の課題の密接な関係が見られた。

ま と め

本研究では、調査1において大学生を対象に、分離-個体化の状態が自我同一性の様相にどのような影響を与えているかについて検討することを目的とした。また調査2において、大学生を対象とした自由記述式調査から、自我同一性の拡散の様相を捉え、現代の青年期の自我同一性の拡散への取り組みについて調査することを目的とした。

調査1の結果、同一性地位判定尺度の下位尺度とJASITAの下位尺度の相関分析において、「自惚れ」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」は、自己にエネルギーが注がれているという共通点を持つことがわかった。また、分離の力が強い「両親からの分離欲求」、「対人交流の拒否」は同一性地位判定尺度の下位尺度と負の相関が多く見られ、分離の力が弱い「共生欲求」、「分離個体化の達成」、「友人関係の確立」、「一人でいられなさ」は同一性地位判定尺度の下位尺度と正の相関が多く見られた。同一性地位とJASITAの1要因被験者間分散分析の結果、分離欲求・反応に

大学生における自我同一性と分離個体化との関連-自我同一性の拡散の経験と取り組みによる現代青年期の自我同一性課題の検討

含まれる「両親からの分離欲求」と「対人交流の拒否」は、同一性地位が低い者の方が多く生じていた。また、分離反応の緩和に含まれる「友人関係の確立」は、同一性地位が高い者の方が多く生じていた。この結果から、分離個体化の達成に向かうほど、同一性地位も達成に向かうような関係性が見られる。

調査2の結果、自我同一性の課題を意識したことがある者は49.72%で、その課題を経験を年齢した人数は13～18歳が目立った。この結果は筆者の仮説を支持せず、Erikson (1956) の理論を支持した。そして、自我同一性の拡散の経験の内容では、自我体験、自分の存在意義、進路について、死について、人間関係、その他の6つの要素が抽出された。また、自我同一性の拡散の経験への取り組みでは、逃げる、何もしない、身を任せる、相談する、置き換え、向き合う、とりあえず前に進む、その他の8つの要素が抽出された。したがって、自我同一性の課題は、自我同一性の課題の内容やその取り組み方によって様々な様相を持つことがわかった。また、Q3の⑤人間関係では、調査1で取り上げた分離個体化の要素である、「両親からの分離欲求」や「対人交流の拒否」、「自惚れ」、「友人関係の確立」の要素を含んでいるものも見られた。このことから、調査2においても、青年期の分離個体化の課題と自我同一性の課題の密接な関係が見られた。

謝 辞

本論文作成にあたり、ご協力して頂いた京都学園大学人間文化学部行廣隆次准教授、並びに、調査の実施にご協力頂いた京都学園大学の先生方、そして調査にご協力頂いた学生の方々に深く感謝致します。

文 献

井上忠典・佐々木雄二 1992 大学生における自我同一性と分離個体化の関連について 筑波大学心理学研究, 14, 159-169
 岩宮恵子 2009 フツウの子の思春期—心理療法の現場から 岩波書店
 Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life Cycle*, W.W.Norton & Co. Inc, New York 小此木啓

吾・小川捷之・岩田寿美子 (訳) 1973: 人間科学叢書4 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31 (4), 292-302
 河合隼雄 1967 ユング心理学入門 培風館
 島田翼 2009 青年期における内的作業モデルと自我同一性との関連—危機および積極的関与という視点からの検討— 京都学園大学人間文化学部生論文集, 7, 66-79
 新村出編 2008 広辞苑第6版 岩波書店
 高橋蔵人 1989 青年期における分離個体化に関する研究 質問紙調査による考察 心理臨床学研究, 7 (2), 4-14
 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子編 1984 アイデンティティ研究の展望1 ナカニシヤ出版
 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子編 1998 アイデンティティ研究の展望V-1 ナカニシヤ出版
 廣澤愛子 2010 「解離」に関する臨床心理学的考察—「病的解離」から「正常解離」まで— 福井大学教育実践研究, 35, 217-224
 Brandt, D.E. 1977 *Separation and Identity In Adolescence Erikson and Mahler-Some Similarities*. Contemporary Psychoanalysis, 13, 507-518
 Mahler, M.S. 1975 *The Psychological Birth of the Human Infant*, Basic Books, New York
 高橋雅士・織田正美・浜畑紀 (訳) 2001: 精神医学選書第3巻 乳幼児の心理的誕生 母子共生と個体化 黎明書房
 増井金典 2010 日本語源広辞典増補版 ミネルヴァ書房
 松村明編 2006 大辞林第3版 三省堂
 山口智 2006 想像上の仲間に関する研究—二つの発現開始時期とバウムテストに見られる特徴— 心理臨床学研究, 24 (2), 189-200
 山下明昭 1994 「いちおう」と「とりあえず」の一考察 國語表現研究, 7, 1-9
 山本誠一 1993 青年期における分離-個体化と不安 筑波大学心理学研究, 15, 195-200
 渡辺恒夫・高石恭子編 2004 〈私〉という謎 自我体験の心理学 新曜社